

## 皆さんの先輩は・・・「わが青春の記録」(生徒生活体験発表会)

「わが青春の記録」という文集は、東京都高等学校定時制通信制生徒生活体験発表会で発表された生活体験の記録です。

東京都高等学校定時制通信制生徒生活体験発表会は、昭和28年から69回を数える歴史と伝統を持つ大会です。文集には、真剣に生きようと努力している高校生の姿がつつられています。その一つ一つが、挫折や困難を乗り越え、自己実現を図ろうとすることの大切さとすばらしさを教えてくれます。代表として、令和3年度の文集から、ジョモックさんと岩田さんのお話の一部を抜粋します。

### 「My Story」

都立江戸川高等学校 三年 ジョモック サラ シシリア

私は日本で生まれ育ち、出身は茨城。最初に学んだ言語は日本語。しかし私の両親はフィリピン人。だから私の国籍はフィリピン。私は日本に十歳までいた。純フィリピン人の私は、日本で育てられたから日本の教育を受けた。しかしある事情で強制的に帰国することになった。フィリピン人なのにタガログ語も英語も話せない私は、周りの子たちとも仲良くすることが難しかった。帰国して数年後、ようやくフィリピンの言語を理解することができ、話せるようになった。当時、フィリピンの教育のシステムでは高校が無く、自分が行きたかった国立の大学に合格し通うことになった。しかし、またハプニングが起きた。お母さんの職業柄、日本に戻ることになり、退学の手続きをして日本に戻ってきた。八年後に日本に戻るなんて想像もしていなかった。また一からやり直し、大変だった。全てが中途半端だった。

少しずつ慣れた頃に、私は日本で大学を続けようとしたが、単位が足りないと言われ、高卒が必要だと言われた。当時の私は二十一歳で都立江戸川高等学校の定時制に通うことになった。日本語にも自信があまり無く、友達ができるのか、馴染めることができるのか色々考えていた。しかし、学校生活に慣れることはあつという間だった。友達ができ一緒に家庭科部に入部し調理や手芸をした。二年生の時には生徒会に立候補し、学校行事を盛り上げようと努力している。私は卒業後、専門学校に進学しようと考えている。自分の英語力を活かす仕事にいつか就きたいと考えているからだ。小さい頃はよく「日本人に生まれたかった」と思っていたが、日本に戻り、江戸川高校に来てからはそう思うことが無くなった。今までの経験を振り返ってみると、もし私が日本に戻って来なかったら今の友達に出会えてないだろうし、こんな素敵な経験はしていないだろう。何もかもが中途半端で嫌っていたが、今になっては胸張ってこれが私なんだと言えるようになった。この全て得た経験を通し、何があっても前向きに進んで行こうと私は決心した。これが私だから。これが私の人生で、私の物語だから。

I'm gonna move forward. Because this is me, this is my life and this is my story.

### 「強風でも倒れない樹」

都立八王子拓真高等学校 三年 岩田 勇気

コロナウィルスの脅威が全世界を覆っている。私の高校生活も、コロナウィルスの影響を受け、大きく変わってしまった。入学してしばらくの間は、学業や部活動、友達との時間で毎日が充実していた。しかし、一年生の冬にコロナウィルスの流行が始まってからは、高校生活のすべてが変わってしまった。二年生になってもコロナは終息せず、目標としていた卓球部の全国大会もなくなってしまった。私たちの世代は、学校行事が極端に少ない世代となってしまった。とても残念な気持ちだ。様々なことに取り組みたい意欲はあるのに、時間だけが過ぎてしまう。苦しい気持ちを味わうことになった。

私は小さい頃から体が弱く、何度も入退院を繰り返した。最後の入院は中学三年生の時になる。高校受験の前で、周りが忙しい中、自分だけが学校に行けなかった。焦りや寂しさを強く感じたことを、よく覚えている。その中で、私は小さな目標を立てることを始めた。体力が落ちないよう散歩を日課にするなど、今できることに集中するしかないと考えた。地道な努力を続けた結果、八王子拓真高校に入学することができた。卓球部の活動では、卓球台やボールの消毒作業など、これまで以上に負担が増えた。それでも練習レベルが落ちないように、練習内容を工夫した。秋季大会では、団体戦で三位入賞を果たした。二年生の時には開催すらされなかった全国大会が、今年度は開催された。これまでの努力が報われ、何とか全国大会に出場することができた。結果は三回戦進出。学習面においては自宅学習や分散登校などを経験し、慣れない環境で勉強に励むことは容易ではなかったが、成績を上げていき、学力優良生徒になることができた。

私の夢は学校の先生になることだ。先生という職業なら、私が経験したことを活かせると考えたからだ。どんなに大きな壁にぶつかるうとも、自分ができることを全力で実行する。そうすれば、どんな困難も、きっと乗り越えられることを教える先生になりたい。コロナウィルスという暴風がいつ吹き止むのか分からない。だからこそ、私は夢のために基礎を固めることから始めた。どんな強風でも倒れない樹になり、いつか実を結ぶために。